



夢・鏡・迷路

吉行淳之介



夢・鏡・迷路

吉行淳之介



潮出版社

夢・鏡・迷路

定価 一〇〇〇円

昭和五十六年 六月二十五日 印刷

昭和五十六年 七月二十五日 発行

著 者 吉 行 淳 之 介

発行者 富 岡 勇 吉

発行所 株式会社 潮 出 版 社

東京都千代田区飯田橋三十一—三
電話 東京(03) 230230 〇〇七四一(販売部)
〇七八一(編集部)

振替 東京 五一六一〇九〇

郵便番号 一〇二

本文印刷 明和印刷株式会社

付物印刷 栗田印刷株式会社

製 本 株式会社鈴木製本所

(乱丁・落丁本は送料弊社負担でお取り替
えいたします。)

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めて下さい。

©J. Yoshiyuki 1981 Printed in Japan

夢・鏡・迷路／目次

ザ・ダーク・ルーム……………	ジョン・ベスター	7
批評の怖しさ……………	川村二郎	41
条件反射以前のもの……………	島尾敏雄	73
気紛れ「ことば」対談……………	森茉莉	97

小説作法の違い……………水上 勉 117

女について……………田久保英夫 137

夢・鏡・迷路……………種村季弘 183

あとがき 209

装
幀

中
島
か
ほ
る

夢^{ゆめ}

・

鏡^{かがみ}

・

迷^{めい}

路^ろ

ザ・
ダーク・
ルーム

ジョン・
ベスター

ジョン・ベスター

一九二七年八月、イギリス生
れ。ロンドン大学卒。東大講
師、翻訳家。訳書『黒い雨』『暗
室』『山本五十六』他。

翻訳過程での著者への質問

吉行 英訳の「暗室」(The Dark Room)の再校が出たぐらいのときに、ベスターさんから連絡があつて……。

ベスター そんなに遅かったですか。

吉行 だつたと思いますね。

ベスター そうですか、申しわけない。

吉行 いえいえ。その電話で、日本人のジャーナリストだとぼくはそのとき思つたわけ、話し方とか声の感じとかね。そうしたらベスターさんで、ちよつと二、三疑問があるからという。それで、日本語のニュアンスみたいな話かと思つて会つたら、そういうのでは全然なくて……。

ベスター そういうのもいろいろとお聞きした方がよかつたかもしれませんね。

吉行 いや、ぼくの言つてるのはそういう意味じゃないです。それはもうわかっちゃつてて、その上で、ここは論理としてどうも変じゃないかと言われてね。それがどこの部分だったか、ちよつとぼくは忘れちゃつててね。

ベスター　そうですね。ぼくもさつき本をめくって見たんですけど、どこどころか、具体的にはぼくもよく覚えてないんですね。

吉行　それで、たいへんぼくはおもしろかったのは、文芸雑誌の信頼できる編集長がクレームをつけてる感じなのね。そういうことよくあるんですよ。ぼくは、相手によりけりだけど、素直に聞くわけ。一緒になって考えて、そのクレームを聞くわけです。それによって作品がよくなる場合が非常に多いんですね。そういう感じを受けて、ずいぶん説明して、最終的に、どうもここは削った方がよりよくなるというようなところが……。

ベスター　少しありましたね。

吉行　ね。一ページほど削ったのが二カ所あったんですね。それがどこなのかね。それから二、三行削ったのが数カ所あったんだ。ぼくは、今度「暗室」がもう一度本になるときは、そこを削ろうと思ってたのね。

ベスター　確かそうおっしゃってましたね。

吉行　ええ。そうしたら、それがどこかわかんなくなっちゃったんだ（笑）。

ベスター　ぼくも実は困ってしまった。そのためにお聞きするのが遅くなったのかもしれないけどもね。これはその当時吉行さんにくどいほど申し上げたと思いますけれども、もちろんこういう本は、そう何もかも論理的に、これはどういう意味ですか、どうなっていますかと、そういう質問をする種類のものじゃないとよくわかっていましただけに、あんまりくどく、どうなっていますか、論理的にはどうのこうの……とお聞きしたくなかったんですけどね、もしかしたら

怒られちゃうかもしれないと思って（笑）。

それで、やはり吉行さんも翻訳の経験があたりですからね、よくわかっていただけたらと思いますけど、普通の読者として本を読むのと翻訳するのとじゃ、ずいぶん違いますね。いざ翻訳しようということになりますと、普通の読者に気がつかない細かいところが出てきますね。そういう意味で確かめて……。

吉行 やっぱり論理的に納得できないといけませんね、訳してる場合に。

ベスター そうですね。それから、これもその当時ちよつと話し合っただけだと思いますけれども、どちらかというと、日本の読者よりも向こうの読者の方がうるさいんじゃないかと思えます。もちろん一概には言えません。個人的には、日本人でも物すごくうるさい人もいますでしょうけどね。どうでしょう。

吉行 いや、それで、ぼくの言っていることが誤解されると困るんだけど、いい意味でというか感謝の気持ちでぼくはいま話をしてるんですよ。

ベスター はい、そのつもりで聞いてます（笑）。一般に、たとえば日本語という言葉は論理的じゃないとか、そういうことを言われていますけれども、ぼくは必ずしもそうじゃないと思うんです。ただ、以前にある英文の雑誌で翻訳の仕事をやっていましたけれども、そのときも思ったことですけれども、はっきり言えば、日本の出版社では、——これは吉行さんの場合じゃないですけれども——編集者が書いた人に対して、たとえ意味が通じなくても、これはどういう意味ですかと厳しく追求しようとする態度が、向こうの編集者と比べたら少ないんじゃないでしょうか。つま

り、読者よりも本や原稿を書いた先生に対して責任を持って、遠慮すると言いますか……。もちろん向こうでも、いろいろと本を読んでいますと、どんな偉い人でも、書き手はあまりに自分の書いた原稿に近いから、よく知ってるからこそ、いろいろと気がつかないことがあると思うんですけれども、そういうことに対しては向こうでは、編集者側で非常にきつく追求するんじゃないかと思うんですけど、そういう態度は日本の編集者の場合どうでしょうか。

吉行　ぼくの場合は、ある文芸雑誌の編集長の例なんですけど、その人はこわいんです。一々ここはどうなんだと追求してくる。それが当たってるんですね。ぼくは彼が編集長時代に十数年つき合いましたんで、そういうやりとりで馴れてて、ぼくとしてはありがたい存在だったんですね。ただ、彼ほど厳格なのはほかにいませんね。

ベスター　そうですか。これは大分前の話になりますけれども、私が仕事をしていた新聞社では、各方面のいわゆる大先生ばかりに原稿を頼んでいたわけですけども——これも昔と比べていまはいろいろ変わってきているんじゃないかと思えますけれども——その当時の大先生というのは意外と、早く書いたためか、論理的になつてない原稿も……。

吉行　それは新聞小説？

ベスター　いや、これは文学じゃなしに、普通の経済関係とか文化関係、政治関係もいろいろあったわけですよ。私、そのころもつと若かったし、自分の判断じゃどうしてもよくわからないから、編集の人のところへ持っていった、これを説明してくださいというわけですよ。そうしたら、やはりどういう意味かわからない、説明できないんです。

よくに言わせると、当然、大先生だからこそ、先生のところへ持つて行って、申しわけないですけど、ちよつとわからないから説明していただけませんかと堂々とやるはずなんですけれども、ところがそうじゃない。これはだれだれさんだから、ちよつとこれは……ということになつてね、そのまま。これは一例にすぎないんですけれども。

吉行 たたとえばイギリスにおいてはどうですか。

ベスター 私も経験がないもんですから、本や雑誌で読んだことしか知らないんですけれども、どんなに偉くなつても、やはりかなり聞かれるらしいんですね。それは人間である以上当然なことだと思ひます。

これはレベルが低い話ですけれども、翻訳していても、たとえば、一応下訳をつくつて、それでちよつと置いて、それからまた手に取つて読み返すでしょう。そうすると、ああ、これは使ひものにならないと自分でも思うでしょう。だから一生懸命直すでしょう。また置いて、もう一度手を入れるでしょう。これなら完全だ、自分のベストだと思つて、知人に渡して読んでもらうと、すぐ、ひどい間違ひや、なつてないところがいつぱい出てくるんです。

やはり書き手と書いた物との距離というのはあんまり近いからね。だれでも当然そういうことが多いと思ひます。

だから、そういう、編集者として当然やるべきことをやらない場合もあるんじゃないでしょうか。ただ、これは一般論で、吉行さんの場合を言つてゐるわけじゃないんです。ただ、翻訳する場合、どうしてもそういう細かいところにこだわることはあると思ひます。

吉行 だから、それはいいことだと思うんだ。

ぼくは英語が苦手なもので——それでなぜ翻訳したのかと言われると、これはまた別の話になってくるんだけど——読むのにひどく時間がかかるもので、ベスターさんに訳していただいた「暗室」は、最初の一ページと終わりの一ページを読みまして……。それで、その文体が、平明で、そのくせ単語の使い方なんかかなり凝ったところがある翻訳になっていて、エレガントな文章だと思いました。それで、これを読んだ、さるイギリスの人が、そのとおりの訳だと言ってしまったね。

ベスター そうですか、うれしいことです。そういう点に一番力を入れてみたつもりです。外国人が日本語の文体をどうのこうの言うのは、ちよつとどうかと思いますけれども、本当に自分もどのくらいよさがわかってるか——これは謙遜じゃなくて、本当にそう思っているんです。ただ、ぼくなりに読んでみて、吉行さんの文体、文章といえますか、非常に惹かれたのは確かです。もちろん、訳しやすいというものはないです。これならやりいだろうと思って、実際かかってみると、それなりの独特のむずかしさというものがわかってくるんです。その中でも、「暗室」は非常に簡潔な文章ですからね、どっちかというと、訳しにくい方じゃないでしょうか。

たとえば、大江健三郎さんの文章は、吉行さんと比べたら饒舌な方でしょう。これは英訳がむずかしいようで、意外とやりいいんです。そのまま訳しても一応の……。

吉行 なるほど。

ベスター 英語になるんじゃないでしょうか。ところが、吉行さんの場合は、非常に日本的な文章